

スポーツ行動の予測因に関する研究(3) : 男女・年代別の比較

徳永, 幹雄
九州大学健康科学センター

橋本, 公雄
福岡工業大学

金崎, 良三
九州大学健康科学センター

多々納, 秀雄
九州大学健康科学センター

<https://doi.org/10.15017/415>

出版情報 : 健康科学. 6, pp.129-140, 1984-03-30. 九州大学健康科学センター
バージョン :
権利関係 :

スポーツ行動の予測因に関する研究 (3)

—男女・年代別の比較—

徳 永 幹 雄* 橋 本 公 雄**
金 崎 良 三* 多々納 秀 雄*

A Study on the Factors Predicting Sport Activity (3) :
Comparison between Males and Females, and Their
Respective Ages

Mikio TOKUNAGA* Kimio HASHIMOTO**
Ryozo KANEZAKI* Hideo TATANO*

Abstract

The present study was carried out to clarify common or different characteristics of sociological, psychological and physical factors predicting sport activity, comparing both sexes and their respective ages.

For making the theoretical frame work of factors predicting sport activity, G. S. Kenyon's sport socialization theory and M. Fishbein's behavioral intention model were used. And on the basis of them, forty five sociological and sixteen psychological items were selected, and five physical items were added.

The questionnaire was distributed to 1050 male and 949 female junior high, senior high school, and college students, including adults, in Fukuoka and Kumamoto prefectures from June to July in 1981. The data was analyzed by Hayashi's Quantification Theory (2). The results were summarized as follows :

1) Concerning the result of the analysis on the whole, sport involvement and consciousness (present sport club, pattern of sport involvement and degree of sport forte, etc.) and sport conditions (present existence of friends, time, etc.) were indicated especially as factor groups having strong correlations. Except for the above factors, behavioral intention of the psychological factor groups had a very strong correlation also.

2) Concerning the comparison between males and females, the factor groups of sport involvement and consciousness (present sport club, pattern of sport involvement and degree of sport forte, etc.) and behavioral intention were commonly related and indicated strong sport activity. However, sport condition and physical factor groups were stronger related to females than to males.

3) Concerning the result of analysis to each age groups, factor groups of sport involvement and consciousness, sport condition, and physical factor were all related strongly

* Institute of Health Science, Kyushu University 11, Kasuga 816, Japan

** Fukuoka Institute of Technology, Simowajiro, Fukuoka-city, 811-02, Japan

to sport activity. The factor group of sport involvement and consciousness were especially strongly related. Also, some variables as to the power of determining sport activity showed an increasing or decreasing tendency according to ages. The former variables were birth place, number of brothers, father's career, mother's career, commuter time, degree of sport forte, normative belief toward neighbors, factor of obesity on belief and factor of adaptability within character; the latter being the occupation of family, income of family, existence of past instructor, and character.

(Journal of Health Science, Kyushu University, 6: 129~140, 1984).

緒 言

スポーツ行動とそれに関する要因の分析に、種々の多変量解析を用いて行われた研究は特に体育社会学の分野に多くみられる¹⁰⁻¹⁵⁾ 18)。しかしながら、その要因からスポーツ行動を予測したり、診断したりしようとする研究は皆無に近い。社会心理学などでは行動変容理論、心理学では各種の心理検査があることは周知のとおりである。最近、アメリカの心理学者 M. Fishbein ら³⁾ や M. Rokeach¹⁷⁾ は従来の態度研究を踏襲して、社会的行動の予測式を提起しているが、こうした行動を予測するような研究は体育学には今のところあまり見られず、わずかに、徳永ら²⁰⁾、土肥ら²⁾、P. K. Riddle¹⁶⁾ が M. Fishbein の予測モデルの適用を試みているのみである。

スポーツ行動は、人々の健康の維持・増進に貢献することが多く、国民の健康不安を反映して、近年、スポーツ参加は増加している。しかし、スポーツ行動は一過性の参加ではなく、持続、継続してこそその効果は期待されるものである。従ってスポーツを実施していくうえで障害になっている要因、あるいはスポーツ実施を規定している要因を分析し、スポーツ行動を予測したり、診断するための方法論を開発することは、重要な意義をもつものと思われる。筆者らのスポーツ行動予測の研究においては、スポーツ行動に関する多くの要因の中から発達段階に応じた重要な要因を抽出し、その要因を用いて個人や集団のスポーツ行動を予測したり、スポーツ行動を実施するうえでの問題点を診断する「スポーツ行動診断検査」を作成することが究極の目的である。スポーツ行動を予測、診断するためには、まず、スポーツ行動を規定する要因を明らかにする必要がある。体育学の分野で、これまで行われてきた規定要因の分析的研究は、調査対象や、分析手法、分析範囲や要因のカテゴリーなどに違いがあり、さらには、規定要因の理論的枠組が明確でなかったりして、一般化するには余りに問題が大きい。筆者

らのスポーツ行動の予測モデルは、G.S. Kenyon⁹⁾ の社会化理論、M. Fishbein³⁾ の行動意図予測理論に準拠しており、これまでの一連の研究において、多々納ら¹⁹⁾、金崎ら^{7) 8)} は主に社会的要因を、徳永ら²⁰⁻²³⁾ は心理的要因をそれぞれ独自の立場から分析してきた。そして、スポーツ行動の規定要因として有効な変数を精選してきた。

そこで、本研究では、社会的要因と心理的要因を統合して調査を行い、男女別、年代別にどのような相違点あるいは共通点がみられるかを明らかにしようとした。

方 法

1. 調査時期及び対象

昭和56年6月～7月に福岡県と熊本県に居住する中学生500名(男子259名、女子241名)、高校生500名(男子246名、女子254名)、大学生576名(男子285名、女子291名)、社会人413名(男子250名、女子163名)の合計1,999名(男子1,050名、女子949名)を対象とし、質問紙法による調査を実施した。

2. 調査方法

調査は中学生、高校生はクラスの担任教師に依頼し、大学生は体育の実技および、講義の時間に調査した。社会人については郵送法および手渡しによる調査を実施した。

3. 調査内容

1) 社会的変数

変数の構成は、基本的特性(4項目)、家庭環境(10項目)、生活時間・意識(9項目)、過去のクラブ経験(5項目)、スポーツ関与意識(5項目)、重要な他者(5項目)、スポーツ条件(10項目)の要因群から成っており、合計48変数である。なお、各変数のカテゴリについては金崎ら^{7) 8)}、多々納ら¹⁹⁾の報告を参照されたい。

2) 身体的変数

この変数は、体力・運動能力に関する変数として「持久力」、「筋力」、「走力」、体格に関する変数とし

て「たくましさ」、健康・疾病に関する変数として「健康度」の5項目で構成された。各変数とも4段階のSD法で測定された。反応カテゴリーについては、徳永ら^{22) 23)}の報告を参照されたい。

3) 心理的変数

この要因群は M. Fishbein の行動意図予測モデルに用いられる変数を骨子として、それに性格変数が加えられた。従って変数の構成は、スポーツ実施への行動意図(1項目)、スポーツ行動に対する態度(12項目)、スポーツ行動の結果に対する信念(23項目)、他者の期待に対する規範(3項目)、性格(13項目)から成っている。

態度、信念、性格の各変数については、主因子解、ノーマルバリマックス回転による因子分析を行った。その結果、態度変数からは「快感情因子」、「不安感情因子」と命名し得る2因子を抽出した(付表1参照)。

信念変数からは「社会生活向上因子」、「心理、社会的障害因子」、「肥満因子」と命名可能な3因子と解釈不可能な第4因子を抽出した(付表2参照)。なお、分析には第4因子は削除した。性格変数からは、「適応性因子」、「活動性因子」、「意志性因子」、「情緒性因子」と命名し得る因子を抽出した(付表3参照)。

また、態度、信念、性格の各変数を合計したのも1つの変数として加えた。従って、最終的には心理的変数は、合計16変数となった。なお、測定法については徳永ら^{22) 23)}の報告を参照されたい。

4) スポーツ行動

判別されるべき外的基準としてのスポーツ行動は、種々のスポーツ行動を総括した意味での「週平均のスポーツ実施程度」でおさえた。そして、「週平均3日以上」何らかのスポーツを実施している者をスポーツ実施群、「月1～2日」程度の者と「全くしていない」者をスポーツ非実施群とした。年代別のサンプル数を表1に示した。

表1. スポーツ実施群・非実施群の年代別のサンプル数

区分	中学生 N=405	高校生 N=379	大学生 N=389	社会人 N=316
外的基準				
スポーツ実施群 (週3日以上実施)	293 (73.3%)	219 (57.8%)	104 (26.7%)	89 (28.2%)
スポーツ非実施群 (月2回以下)	112 (27.2%)	160 (42.2%)	285 (73.3%)	227 (71.8%)

4. 分析方法

用いられた変数、要因は定性的変数と定量的変数が混在しているため、数量化理論第Ⅱ類を適用し分析を試みた。解析の条件は外的基準 $T=2$ 、アイテム数62～69である。

結果と考察

1. 判別の精度

数量化理論第Ⅱ類による分析方法は、説明変数全体として外的基準をどの程度判別したかを相関比でみる事ができ、その値は1に近い程判別力が高いことを意味する。そこで、それぞれの分析対象ごとに、外的基準に対する相関比ならびに判別成功率をみることに

表2. 外的基準に対する判別力と相関比

	全 体	男 子	女 子	中 学 生	高 校 生	大 学 生	社 会 人
相 関 比	.867	.863	.897	.880	.937	.925	.926
判別力(%)	92.3	93.7	95.3	97.5	98.7	98.7	99.7

する(表2)。相関比は、.863～.937の範囲であり、この種の研究では顕著に高い値であるといえる。一連の研究においても、金崎ら⁷⁾が社会的要因を分析した時の相関比は、男子、.480、女子、.438であり、徳永ら²²⁾が心理的・身体的要因を分析した時は、男子、.818、女子、.756であった。これらの結果に比べ、今回の相関比は顕著に高く、満足すべき値である。このように相関比が高くなったことは、これまで、規定要因として有効な変数の精選をしてきたこと、今回の分析では判別される外的基準の「週1～2日」の中程度のスポーツ実施を削除したこと、さらには社会的要因と心理的・身体的要因を一緒にまとめて分析したことなどによるものと考えられる。

次に、全体、男女別、年代別で相関比をみると年代別では、.880～.937(判別成功率は97.5%～99.7%)と高いのに比べ、全体や、男女別では、.863～.897(判別成功率は、92.3%～95.3%)と若干低くなっていることがわかる。これは、年齢が広範囲の対象を一括にしたために、各年代で規定力を有する変数が互いに相殺してしまうためではないかと考えられる。筆者らは日本人のスポーツ行動の規定要因を一般化するために中学生から社会人までを含めて言及しようとしているが、その点若干問題が残る。

2. スポーツ行動の規定要因

数量化理論第Ⅱ類の分析によって算出される偏相関係数およびその有意性と順位を、表3、4に示した。以下、各要因群ごとにみていくことにする。

1) 基本的特性

この要因群は中学生、高校生、大学生などの学生では対象となっていないが、分析ではすべて非該当として数量化され処理されている。従って、全体や男女別の分析では、その非該当の影響が現われている可能性もあるので、ここでは、純粋に社会人に限って述べることにする。

社会人では、「結婚の有無」、「子供の年齢」、「職業」などの変数に1%水準で有意性が認められ、スポーツ実施・非実施に対し規定力がうかがえる。中でも「子供の年齢」(第14位)は比較的高い規定力を有していた。筆者ら²¹⁾は以前ランニング実施者の諸属性を明らかにしたが、職業とランニング実施との間に有意な関係を見出しており、今回の結果は、それと類似するものであった。

2) 家庭環境

この要因群は10変数で構成されている。スポーツ実施・非実施に関与する変数は全体、男女別では相対的に少ないが、年代別、特に大学生、社会人では比較的多くみられる。このように、規定力をもつ変数が年代別に多くみられ、全体や男女別では少ないというのは明らかに対象者を年代別という限定したものから、一般化したために各変数の規定が互いに相殺してしまったためと考えられる。従って、このことは家庭環境要因は年代によってその規定力が異なっていることを示すものである。

全体でみると、「家庭の職業」、「母の学歴」、「居住区」などに5%水準以上の有意性が認められる。男女別にみると、男子は「居住区」、「出生順位」、「父の学歴」、「母の学歴」に、女子は「出生地」、「母の学歴」、「家庭の職業」にそれぞれ1%水準で有意な規定力がみられた。男女ともに「母の学歴」は共通して規定力を有しているものの両者間には規定力をもつ変数に相違がうかがえる。

年代別にみると中学生、高校生、大学生の学生時代を通じて、「父の学歴」、「家庭の職業」、「家庭の収入」は共通して有意な規定力がみられた。社会人は、「家庭の収入」、「親友の数」を除く8変数に5%水準以上の有意性が認められ、学生に比べ、家庭環境要因がかなり関与していることが分かる。特に、「父の学歴(第2位)」、「母の学歴(第9位)」、「出生地(第7位)」な

どは非常に高い規定力を示している。なお、これらの3変数は年代が進むにつれて規定力が高くなる傾向がみられた。その反面、「家庭の職業」や「家庭の収入」は、中学生、高校生では高い規定力を示しているのに大学生、社会人ではその規定力が低くなる傾向がみられた。家庭の職業と収入はある意味では相関する変数かもしれないが、荒井ら¹⁾は社会人を対象として、スポーツ実施に金と暇の関連性の低さを指摘しており、筆者ら²¹⁾も社会人のランニング実施者の方に低所得者が多かったことを認めており、今回の結果はこれらと類似するものである。

3) 生活時間・意識

生活時間(5変数)と生活意識(4変数)からなるこの要因群では、全体をみると「勉強時間」、「通勤(学)時間」、「休日の自由時間」および、「人生観」に5%水準以上の有意な規定力がみられた。特に、「通勤(学)時間(第11位)」、「人生観(第8位)」は高い規定力を示しており、これらの2変数は男女共通して規定力がみられた。しかし、男子は「生活の満足度(第13位)」、女子は「勉強時間(第10位)」にそれぞれ高い規定力を有し、男女特有の傾向もみられる。

年代別にみると、高校生に最も多くの変数に有意性が認められ、この要因群の強い関与がうかがえる。中学、高校、大学の学生においては、「TVの視聴時間」、「文化、趣味サークル」には共通して規定力をもっているが、社会人にはみられず学生と社会人との間に相違がみられる。また、大学生において規定力のみられない「人生観」は他の群では比較的高い規定力を有し、特に高校生は第5位を占め高かった。その他、規定力の高い変数は、中学生の「仕事と余暇観(第3位)」、高校生の「生活満足度(第6位)」、社会人の「勉強時間(第3位)」と「生活満足度(第6位)」などであった。ここで、「通勤(学)時間」についてみてみよう。中学生は規定力がないのに年代が進むにつれてその規定力は増し、社会人においては第8位と高い規定力を示している。これは、通勤(学)の範囲と関係するものであり、中学生は同じ校区から通学するのでそれ程通学時間に大差ないであろう。しかし、高校、大学、社会人になる程、その通勤(学)範囲が広がり、その為の時間的制約が、スポーツ実施・非実施に規定力としては働くものと推察される。

4) 過去のクラブ経験

この要因群も基本的特性と同様に、大学生などは、当然社会人の「運動クラブ経験」はあり得ず、非該当として処理され分析された。他の中学生、高校生につ

表3. スポーツ行動を規定する要因(偏相関係数)

要因群	変数	全体	男子	女子	中学生	高校生	大学生	社会人
基本的特性	結婚年齢							.171**(36)
	子供の年令							.258**(14)
	職業	.063*(21) .054*(27)	.144**(5) .125**(9)	.105**(15)				.195**(32)
家庭環境	居住地区	.052*(29)	.085**(24)	.095**(21)		.104*(47)		.223**(21)
	居住形態						.143**(30)	.281**(7)
	兄弟数						.106*(45)	.220**(22)
	出生順位		.108**(14)		.103*(35)			.162**(40)
	父の学歴		.083**(25)		.156**(21)	.136**(34)	.201**(9)	.323**(2)
	母の学歴	.071**(15)	.091**(22)	.124**(11)		.122*(42)	.198**(10)	.280**(9)
	家庭の職業	.074**(13)		.164**(5)	.205**(11)	.232**(13)	.159**(24)	.126*(52)
生活時間・意識	家庭の収入				.199**(13)	.223**(15)	.151**(28)	.145**(29)
	家庭の人数							
	勉強時間	.051*(31)		.126**(10)	.114*(32)	.156**(28)		.315**(3)
	通勤(学)時間	.082**(11)	.101**(16)	.085**(27)		.132**(36)	.182**(20)	.280**(8)
	平日自由時間					.133**(35)	.135**(34)	.131*(49)
	休日自由時間	.053*(28)	.098**(19)			.178**(23)		
	T V 視聴時間				.150**(25)	.181**(20)	.142**(33)	
過去のクラブ経験	文化・趣味サークル				.130**(29)	.129*(37)	.151**(26)	
	人生観	.097**(8)	.098**(18)	.119**(13)	.201**(12)	.307**(5)		.255**(15)
	仕事と余暇観				.264**(3)		.102*(47)	.212**(26)
	生活満足度		.108**(13)			.297**(6)		.291**(6)
	小学校クラブ							
	中学校クラブ				.157**(20)			
	高校クラブ		.092**(21)	.102**(17)		.312**(3)	.204**(8)	.129*(50)
意識・スポーツ関与・	大学クラブ			.104**(16)			.186**(17)	.156**(42)
	社会人クラブ	.104**(7)	.116**(10)	.159**(6)				.133**(48)
	現在のスポーツクラブ	.398**(1)	.387**(1)	.443**(1)	.454**(1)	.456**(1)	.398**(2)	.167**(37)
	スポーツ実施の型	.206**(3)	.256**(3)	.140**(7)	.195**(14)	.373**(2)	.177**(21)	.411**(1)
	見る・聞くスポーツ関与	.086**(10)	.145**(4)	.081*(29)	.231**(4)	.158**(26)	.187**(15)	.129*(51)
	スポーツ得意度	.122**(5)	.126**(8)	.179**(3)	.175**(19)	.105*(44)	.220**(6)	.301**(5)
	スポーツの好嫌	.071**(14)	.134**(6)		.222**(7)		.184**(19)	.266**(12)

注) () 内は順位を示す。

** $p < .01$ * $p < .05$

表4. スポーツ行動を規定する要因(偏相関係数)

要因群	変数	全体	男子	女子	中学生	高校生	大学生	社会人
重要なる他者	父のスポーツ熱心					.212**(14)	.116* (41)	.121* (55)
	母のスポーツ熱心			.100**(18)	.120* (31)			.159**(41)
	家族の奨励					.144**(32)		.139**(47)
	友人・先輩の奨励		.100**(17)		.218**(8)	.151**(31)	.184**(18)	.266**(11)
	地域の人の奨励				.220**(6)	.188**(17)	.265**(3)	.189**(34)
スポーツの条件	過去の	場所の有無	.069**(18)		.122**(12)	.256**(9)	.195**(12)	.179**(35)
		クラブ・友人の有無				.282**(7)	.122**(38)	.200**(29)
		指導者の存在	.086**(9)	.102**(15)	.086**(26)	.207**(10)	.179**(22)	.116**(40)
		時間の有無	.056* (25)	.113**(11)				.125* (53)
	現在の	場所の有無		.081**(27)	.091**(22)	.101* (37)	.101* (48)	.125* (37)
		クラブ・友人の有無	.070**(16)	.078**(29)		.143**(26)	.195**(16)	.110* (43)
		指導者の存在	.113**(6)	.080* (28)	.132**(8)	.183**(18)	.269**(8)	.251**(4)
		時間の有無	.069**(19)		.126**(9)		.125* (39)	.129* (36)
		時間の有無	.167**(4)	.129**(7)	.202**(2)	.292**(2)	.185**(18)	.163**(23)
		チャンスの有無	.080**(12)	.092**(20)	.096**(20)	.097* (38)	.157**(27)	.221**(5)
								.214**(24)
身体的要因	持久力	.052**(30)	.082**(26)	.081* (30)	.187**(16)	.144**(31)	.157**(25)	.247**(17)
	筋力			.107**(14)		.103* (47)	.105* (46)	.301**(4)
	走力	.069**(17)		.089**(23)	.189**(15)	.236**(10)	.196**(11)	
	健康度			.082**(28)	.155**(22)	.230**(12)	.192**(13)	.162**(39)
	たくましさ				.121* (30)	.139**(33)	.133**(35)	.151**(43)
心理的・性格的要因	スポーツへの行動意図		.245**(2)	.293**(2)	.172**(4)	.212**(9)	.308**(4)	.451**(1)
	規範	家族の規範	.054* (26)		.098**(19)	.112* (34)		.114* (56)
		友人の規範			.088**(20)		.112* (42)	.171**(22)
		地域の人の規範				.154**(24)	.171**(24)	.186**(16)
	信念	社会生活向上	.062* (22)	.078* (30)		.125* (38)	.217**(7)	.208**(27)
		心理社会障害			.087**(25)	.142**(27)	.108* (44)	.198**(30)
		肥満	.057* (24)			.149**(30)	.142**(32)	.224**(20)
	信念合計	信念合計	.062* (23)	.090**(23)		.139**(28)	.106* (43)	.190**(14)
								.218**(23)
	態度	快感感情	.068**(20)			.155**(23)	.206**(15)	
		不安感情		.109**(12)		.185**(17)		.122**(39)
要因	態度合計					.179**(21)	.142**(31)	
	性格	適応性				.104* (46)	.114* (42)	.268**(10)
		活動性				.102* (36)	.114* (41)	
		意志性				.112* (33)	.182**(19)	.234**(18)
		情緒性					.151**(27)	.140* (46)
	性格合計					.226**(5)	.166**(25)	.122* (54)

注) () 内は順位を示す。

** $p < .01$ * $p < .05$

いても同様である。従って、真の意味で、「クラブ経験」の規定力をみるには、全体とか、男女別には問題がありここでは年代別に限ってみることにする。各年代とも、その年代の「クラブ経験」には全て有意性が認められ、遠い過去の経験より近い過去の経験が規定力を有するといえる。また、小学生、中学生時代のクラブ経験には有意性が認められないが、高校時代以後のクラブ経験はどの年代においても規定力がみられる。特に、高校生、大学生においては、「高校クラブ」はそれぞれ第3位、第8位を占めて高い規定力がみられた。今回は過去のクラブ経験に有意な規定力がみられたが、金崎ら^{7) 8)}の一連の研究報告では低い規定力しか見出せていなかったことである。しかし、Greenendorfer⁵⁾、長沢・丹羽ら¹³⁾、糸野ら⁹⁾の報告はいずれもスポーツ参加に強い影響を及ぼしていることを指摘しており今回の結果はこれらと一致する結果であった。また、糸野ら⁹⁾の高校時代のクラブ参加が強い影響力をもつとの見解とも一致するものがあつた。

5) スポーツ関与・意識

この要因群は、全体、男女別、年代別を問わず、5項目の変数のほとんどに有意な規定力がみられた。

まず、全体と男女別をみると、「現在のスポーツクラブ」は共に第1位であり、「スポーツの実施の型」、「スポーツ得意度」などの変数も上位を占めていることがわかる。また、男子が「見る・聞くスポーツ関与(第4位)」と「スポーツの好嫌(第6位)」に高い規定力がみられるのに対し、女子は低い規定力か有意性が認められず、男女差がうかがえる。

年代別にみると、各年代とも非常に高い規定力を示す変数が多くみられた。「現在のスポーツクラブ」は中学生、高校生、大学生では第1位か第2位の規定力であり極めて高いが、社会人では、「現在のスポーツクラブ」より、「スポーツ実施の型(第1位)」に高い規定力がみられる。このことは、学生時代はスポーツクラブに所属する機会が多いのに比べ、社会人ではその機会が少なく、むしろ個人あるいは非組織的なグループでスポーツ活動をする場合が多いためではないかと思われる。また、「スポーツ得意度」の規定力は、中学生、高校生の低年代より、大学生や社会人の高年代に高く、逆に「見る・聞くスポーツ関与」は年代が進むにつれて規定力を失っていく傾向がみられた。後者については、年齢が高くなる程、「するスポーツ」から「みるスポーツ」へとスポーツの関与の仕方が変化し、社会人などはスポーツをしない人もスポーツ情報に接しているのではないかと推察される。

この要因を構成する変数はスポーツへの関わりそのもの、あるいはそれに近い性格をもっていることから、多くの変数に高い規定力を示したものと思われる。例えば、「現在のスポーツクラブ」、「スポーツ実施の型」などはある意味では「週平均のスポーツ実施」の関与の仕方を説明するものであり、「スポーツ行動」そのものとも考えられる。従って、これらの変数の規定要因としての取り上げ方については再考すべき点が残される。

6) 重要な他者

重要な他者とは、スポーツをするようになる過程で影響を与えた周囲の人々のことであるが、全体と男女別では、男子の「友人、先輩の奨励」、女子の「母のスポーツ熱心」に有意性が認められただけであった。しかし、年代別に分析すると多くの規定力を有する変数がみられ、前述した家庭環境要因群や生活時間・意識要因群と同様、全体や、男女別では規定力が互いに相殺してしまったものと思われる。

各年代に共通して規定力を有する変数は、「地域の人の奨励」と「友人・先輩の奨励」である。中でも、中学生はそれぞれ第6位、第8位を占め非常に高い規定力であった。大学生の「地域の人の奨励(第3位)」、社会人の「友人、先輩の奨励(第11位)」も高い規定力を有している。このように概して友人、先輩、地域の人といった他者のスポーツ奨励は、家族という身内の者の奨励より各年代とも高い規定力をもっていることが指摘される。しかし、家族の存在に全く影響されない訳でもない。両親の「スポーツ熱心」をみると中学生は母に、高校、大学生は父の奨励にそれぞれ規定力がみられる。それにしても、学生時代で両親の奨励の規定力が変わっていることは興味深い。大学生を対象として、重要な他者の影響力をみたものに糸野ら⁹⁾、Greenendorfer²⁾、金崎ら^{7) 8)}、多々納ら¹⁹⁾の報告があるが、いずれも、重要な他者の奨励がスポーツ実施あるいはスポーツへの社会化に影響を与えていることを指摘しており、今回の結果もそれらと一致するものであった。

7) スポーツ条件

スポーツを実施するのに、過去と現在の諸条件に恵まれていたかどうかをみたこの要因群は、同じ内容条件をもつ5項目の変数から構成されている。

まず、過去のスポーツ条件をみると、全体、性別を問わず、「過去の指導者の存在」は共通して規定力をもっている。年代別にみると、中学生だけが他の年代に比べ、規定力の高い変数が少なく、「過去の指導者

の存在」と「過去のチャンスの有無」だけであった。この2変数については、各年代共通して、規定力がみられた。また、「過去の指導者の存在」は、年代が進むにつれてその規定力は低くなる傾向がみられた。低年代程、現在のスポーツ実施・非実施に過去の指導者の存在が影響していることが示唆される。また、「過去の場所の有無」と「過去のクラブ・友人の有無」に関しては、中学生だけに規定力が認められず、しかも、高校生の規定力が非常に高いことから中学生と高校生の間に断層があり興味深い結果である。

次に、現在のスポーツ条件についてみると、全体では全ての5つの条件に1%水準の有意な規定力がみられた。特に、「現在のクラブ・友人の有無(第6位)」、「現在の時間の有無(第4位)」、「現在のチャンスの有無(第12位)」などの3変数は高い規定力を示しており、男女共通した変数であった。年代別にみると、現在の「場所」、「クラブ・友人」、「時間」、「チャンス」の有無などの多くの条件において、各年代とも共通して有意な規定力を示していた。中学生の「現在の時間の有無(第2位)」、高校生の「現在のクラブ・友人の有無(第8位)」、大学生の「現在のクラブ・友人の有無(第4位)」、「現在のチャンスの有無(第5位)」などは極めて高い規定力を示していた。

このように、概して、スポーツ条件は過去より現在の条件の方が関与しており、しかも、高い規定力を示すことが明らかになった。

8) 身体的要因

身体的要因はスポーツ行動に特有な要因として設定されているが、年代別に特に顕著な規定力を有する変数が多くみられ、全体、男女別では若干規定力の相殺がみられた。

全体的にみると、「持久走」と「走力」の体力に関する変数に5%以上の有意性が認められているものの高い規定力とはいえない。男女別にみると男子より女子の方に多くの有意な規定力を有する変数が認められ、女子の身体的要因はスポーツの実施・非実施に影響を与えるといえる。

年代別にみると、各年代とも、ほとんどの変数に有意な規定力がみられ、「持久走」、「健康観」、「たくましさ」は共通していた。「走力」に関しては、中、高、大の学生には比較的高い規定力を示しているが、社会人は有意な規定力は見出せていない。その反面、社会人は「筋力(第4位)」において、他の年代の規定力が低いのに比べて高い規定力を示した。このことは、社会人は走力を測定する機会が少なく、自己の走力を

筋力程よく認知していないためではないかと推察される。このように、身体的要因群では年代によって、規定力を有する変数に違いがみられた。

9) 心理的・性格的要因

この要因群においても、行動意図を除き、全体、男女別分析において規定力の相殺がみられ、特に、その傾向は性格変数において顕著であった。

全体でみると、性格変数を除き行動意図、規範、信念、態度の各変数において規定力を有する変数がみられた。特に、信念変数では、「社会生活向上因子」、「肥満因子」および、「信念合計」に5%水準の低い規定力がみられた。「スポーツ実施への行動意図」はFisshbein³⁾によれば、行動の決定因として扱われているが、やはり規定力は非常に高く第2位を占めている。この変数は男女とも非常に高い規定力を示していた。しかしながら、その他の心理的・性格変数には共通して規定力をもつものではなく、性差がうかがえる。

年代別にみると、各年代とも多くの変数に有意性が認められるが、共通しているのは、「スポーツ実施への行動意図」、「地域の人々の規範」および、「信念合計」の3変数のみであった。「スポーツ実施への行動意図」は各年代とも規定力は高い。規範変数は「他者は自分がスポーツをすべきだと思っている」という度合をみているが、多くの変数に有意な規定力がみられた。しかし、各年代とも、友人や地域の方は、家族に対する規範より高い規定力をもっているようであり、その友人や地域の人に対する規範は年代と共に高くなる傾向がみられた。信念変数は中学生に比べ、高校生以降、特に大学生、社会人においては、全ての変数に有意な規定力がみられた。態度変数は、社会人においては、全く有意な規定力をもつ変数は認められなかった。しかし、社会心理学の立場では一般的には態度は行動の重要な予測因として取扱われ、筆者ら^{7) 8) 23) 24)}の一連の研究結果においても実証されているので、再検討する必要がある。性格変数は各年代に有意な規定力がみられ、特に、高校生、社会人においては多くの変数に規定力が高かった。また、中学生の「性格合計(第5位)」、社会人の「適応性因子(第10位)」などは高い規定力を示した。これらの行動意図、規範、信念、態度、性格などの心理的要因がスポーツ行動へ規定力を有することは既に筆者ら^{7) 8) 23) 24)}が報告していることと一致した結果である。

3 高い規定力を示す要因

以上、全体、男女別、年代別にスポーツ実施・非実施を規定する諸要因についてみてきた。最後に、高い

表5. 全体・男女別にみた高い規定力を示す変数

全	体	男	子	女	子
1	現在のスポーツクラブ	現在のスポーツクラブ	現在のスポーツクラブ	現在のスポーツクラブ	
2	スポーツへの行動意図	スポーツへの行動意図	スポーツへの行動意図	現在の時間の有無	
3	スポーツ実施の型	スポーツ実施の型	スポーツ実施の型	スポーツ得意度	
4	現在の時間の有無	見る・聞くスポーツ関与	見る・聞くスポーツ関与	スポーツへの行動意図	
5	スポーツ得意度	学 歴	学 歴	家庭の職業	
6	現在のクラブ・友人の有無	スポーツの好嫌	スポーツの好嫌	社会人クラブの経験	
7	社会人クラブの経験	現在の時間の有無	現在の時間の有無	スポーツ実施の型	
8	人 生 観	スポーツ得意度	スポーツ得意度	現在のクラブ・友人の有無	
9	過去の指導者の存在	職 業	職 業	現在の指導者の存在	
10	見る・聞くスポーツ関与	社会人クラブの経験	社会人クラブの経験	勉強時間	

注) 上位10位までを示した。

表6. 年代別にみた高い規定力をもつ変数

中 学 生	高 校 生	大 学 生	社 会 人
1 現在のスポーツクラブ	現在のスポーツクラブ	スポーツへの行動意図	スポーツ実施の型
2 現在の時間の有無	スポーツ実施の型	現在のスポーツクラブ	父の学歴
3 仕事と余暇観	高校クラブ経験	地域の人の奨励	勉強時間
4 見る・聞くスポーツ関与	スポーツへの行動意図	現在のクラブ・友人の有無	筋 力
5 性格合計	人生観	現在のチャンスの有無	スポーツ得意度
6 地域の人の奨励	生活満足度	スポーツ得意度	生活満足度
7 スポーツの好嫌	過去のクラブ・友人の有無	信念(社会生活向上)	出生地
8 友人・先輩の奨励	現在のクラブ・友人の有無	高校クラブ経験	通勤時間
9 スポーツへの行動意図	過去の場所の有無	父の学歴	母の学歴
10 過去の指導者の存在	走 力	母の学歴	性格(適応性)

注) 上位10位を示した。

規定力を示した変数について上位10位までをまとめると表5, 表6のとおりである。

全体では、スポーツ関与・意識要因群(4項目の変数が存在: 以下4とだけ示す), 現在のスポーツ条件要因群(2)および、スポーツへの行動意図の関与度が高かった。

性別では、スポーツ関与・意識要因群(男子5, 女子3)とスポーツへの行動意図に共通して高い関与がみられるが、女子は、現在のスポーツ条件要因群(3)も関与度が高かった。

年代別では、各年代ともにスポーツ関与・意識要因群は2項目ないし3項目の高い規定力をもつ変数が存在し、その関与度は高い。また、中学生の重要なる他者要因群(2), スポーツ条件要因群(2), 高校生の生活意識要因群(2), スポーツ条件要因群(3), 大学生の家庭環境要因群(2), 現在のスポーツ条件(2), 社会人の家庭環境要因群(3), 生活時間・意識要因群

(3)なども高い関与がみられた。各年代共通して規定力を有する変数はみられなかったが、学生, 社会人それぞれ特有に高い規定力を有する変数はみられた。即ち、学生には「現在のスポーツクラブ」, 「スポーツ行動意図」, 社会人には「勉強時間」, 「通勤時間」, 「出生地」, 「筋力」, 「性格(適応性)」などの変数が、それぞれ特有に高い規定力を示していた。

要 約

本研究は、スポーツ行動を規定する関連要因、つまり、社会的要因、身体的要因、心理的要因を性別、年代別に分析した時、どのような規定力を有する変数・要因がみられるか、またその共通点と相違点は何かを明らかにする目的で行なわれた。その為に、中学生から社会人までが研究の対象となり、規定要因の分析には、数量化理論Ⅱ類の判別分析を採用した。主要な結果を要約すると以下のとおりである。

1 外的基準の判別力の精度

判別力をみるための相関比, 判別成功率は極めて高い値が得られ, スポーツ実施・非実施をよく判別した。特に年代別においては顕著であったが, 全体, 男女別では判別力が若干低下し, 各年代の変数の規定力が相殺すると思われる現象がみられた。そのような傾向のみられた要因群は, 家庭環境, 生活時間・意識, 重要な他者, 身体的要因, 心理的要因(但しスポーツへの行動意図は除く)であった。

2 全体からみた規定要因

要因群でみると, スポーツ関与・意識要因, 現在のスポーツ条件要因, 信念の心理的要因に多くの規定力をもつ変数がみられ, 特に, スポーツ関与・意識要因と現在のスポーツ条件要因はスポーツの実施・非実施に強く関与していた。極めて高い規定力をもつ変数は, 上位から順に, 「現在のスポーツクラブ」, 「スポーツ実施への行動意図」, 「スポーツ実施の型」, 「現在の時間の有無」, 「スポーツ得意度」などであった。

3 男女別にみた規定要因

要因群でみると, 男女共通して, スポーツ関与・意識要因, 現在のスポーツ条件要因に多くの規定力をもつ変数がみられ, スポーツ実施・非実施に強く関与していた。しかし, 現在のスポーツ条件要因, 身体的要因は男子より女子の関与度が強く男女差がみられた。

なお, 極めて高い規定力を有した変数は, 男女共通して「現在のスポーツクラブ」, 「スポーツ実施の型」, 「スポーツ得意度」, 「社会人クラブの経験」, 「スポーツへの行動意図」, 「現在の時間の有無」であった。なお, 男子の「見る・聞くスポーツ関与」, 「スポーツの好嫌」, 女子の「家庭の職業」, 「現在のクラブ・友人の有無」, 「勉強時間」などはそれぞれ特有に高い規定力を有していた。

4 年代別にみた規定要因

各年代とも共通して, スポーツ関与・意識要因は高い規定力をもっており, 現在のスポーツ条件要因, 身体的要因なども規定力を有していた。年代とともに規定力が高くなる変数は, 「出生地」, 「兄弟数」, 「父の学歴」, 「母の学歴」, 「通勤(学)時間」, 「スポーツ得意度」, 「地域の人の規範」, 「信念: 肥満因子」, 「性格: 適応性因子」であり, 逆に, 規定力が低くなる変数は「家庭の職業」, 「家庭の収入」, 「過去の指導者の存在」, 「性格合計」などであった。

附記 本研究は「スポーツ行動の予測因に関する研究」で昭和55～57年に文部省科学研究費(一般研究B,

代表徳永幹雄)の補助をうけて進められたものであり, 徳永を中心に企画・実施されたが執筆は橋本が担当した。

引用文献

- 1) 荒井貞光・松田泰定「スポーツ行動に関する実証的研究(Ⅱ)」, 体育学研究, 22-3: 132-52, 1977.
- 2) 土肥 隆・池田 勝・高見 彰・高野 透「中・高齢者の運動・スポーツ実施の規定要因に関する研究」日本体育学会第34回大会号, 219, 1983.
- 3) Fishbein M., and Ajzen I., "Belief, Attitude, Intention and Behavior; An Introduction to Theory and Research", Addison-Wesley; Massachusettes, 1975. pp.216-84.
- 4) Greendorfer S. L., "Role of Socializing Agents in Female Sport Involvement", Research Quarterly, 48-2: 308-09, 1977.
- 5) Greendorfer S. L., "Childhood Sport Socialization Influences of Male and Female Track Athletes," Paper presented at Midwest AAHPER, Research Section, Madison, Wisconsin, p.10, 1979.
- 6) 金崎良三・梅田靖次郎・近藤 衛・佐々木吉正・石堂みゆき「生涯体育の視点からみた大学体育のあり方に関する研究—大学卒業生のスポーツへの社会化と大学体育の影響—」, 九州地区生涯体育研究会, 93-112, 1980.
- 7) 金崎良三・多々納秀雄・徳永幹雄・橋本公雄「スポーツ行動の予測に関する研究(1)—社会学的要因について—」, 健康科学, 3: 55-70, 1981.
- 8) 金崎良三・多々納秀雄・徳永幹雄・橋本公雄「学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(3)—スポーツ関連要因について—」, 健康科学, 4: 77-89, 1982.
- 9) Kenyon G. S. & McPherson B. D., "An Approach to the Study of Sport Socialization", International Review of Sport Sociology, 9-1: 127-39, 1974.
- 10) 桑野 豊・永吉宏英・江橋慎四郎・島崎 仁「スポーツ活動成立要因に関する研究」, 日本体育学会第25回大会号, 187, 1974.
- 11) 桑野 豊・池田 勝・山口泰雄「パス解析によるスポーツ参加の分析」, 筑波大学体育科学紀要, 2: 23-30, 1979.

- 12) 松田泰定・東川安雄・荒井貞光「スポーツ行動に関する実証的研究(3) —スポーツ種目選択行動について—」体育学研究, 24-1: 1-11, 1979.
- 13) 長沢邦子, 丹羽劭昭「過去の運動経験がスポーツや体育への意識におよぼす影響」, 日本体育学会第27回大会号, 129, 1976.
- 14) 永吉宏英・江橋慎四郎・糸野 豊・島崎 仁「フィジカル・レクリエーション成立を促がす要因分析」, レクリエーション研究, 6: 29-37, 1977.
- 15) 丹羽劭昭・長沢邦子「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」, 体育学研究, 23-2: 109-19, 1978.
- 16) Riddle P. K., "Attitude, Beliefs, Behavioral Intention of Women and Men toward Regular Jogging", Doctoral Dissertation, Univ. of Illinois, 1978.
- 17) Rokeach M., and Kliejunas P., "Behavior as a Function of Attitude-toward-Object and Attitude-toward-Situation," Journal of Personality and Social Psychology, 22: 194-201, 1972.
- 18) 多々納秀雄・厨 義弘「スポーツ参加の多変量解析 (I) —数量化理論第II類による要因分析—」, 健康科学, 2: 103-18, 1980.
- 19) 多々納秀雄・金崎良三・徳永幹雄・橋本公雄「学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(2) —社会的要因について—」, 健康科学, 4: 51-57, 1982.
- 20) 徳永幹雄・多々納秀雄・橋本公雄・金崎良三「スポーツ行動の予測因としての行動意図・態度・信念に関する研究 (I) —ランニング実施に対する M. Fishbein の行動予測式の適用—」, 体育学研究, 25-3: 179-90, 1980.
- 21) 徳永幹雄・橋本公雄・多々納秀雄・金崎良三「スポーツ行動の予測因子としての行動意図・態度・信念に関する研究 (II) —ランニング実施者と非実施者の諸属性の比較—」, 健康科学, 2: 91-101, 1980.
- 22) 徳永幹雄・橋本公雄・多々納秀雄・金崎良三「スポーツ行動の予測に関する研究(2) —身体的・心理的要因について—」, 健康科学, 3: 71-76, 1981.
- 23) 徳永幹雄・橋本公雄・金崎良三・多々納秀雄「学生のスポーツ行動の規定要因に関する研究(1) —心理的・身体的要因について—」, 健康科学, 4: 35-49, 1982.

付表1. スポーツ行動に対する態度の因子行列
(回転後)

因子	意見項目	F ₁	F ₂
快感因子	1 楽しさ	-.802	
	2 うきうきした	-.801	
	3 ころよさ	-.796	
	4 満足さ	-.775	
	5 良さ	-.698	
	6 自信めいた	-.591	
不安感情因子	7 みじめさ		.831
	8 はずかしさ		.760
	9 心配性		.749
	10 こわさ		.747
	11 不愉快さ		.706
	12 生活への無益さ		.484
固有値		3.668	3.281
全分散寄与率(%)		30.6	27.3
累積分散寄与率		30.6	57.9

付表3. 性格的変数の因子行列 (回転後)

因子	意見項目	F ₁	F ₂	F ₃	F ₄
適応性因子	1 社交性	.714			
	2 楽天性	.654			
	3 適応性	-.616			
	4 無口	.533		.517	
活動性因子	5 競争的		-.697		
	6 忍耐強い		-.627		
	7 勇気ある		-.600		
	8 指導的		-.544		
意志性因子	9 消極的			.734	
	10 意志力の欠如			.716	
	11 無責任			.473	.468
情緒因子	12 非協力的				.762
	13 気分の変化大				.687
固有値		1.849	1.835	1.830	1.660
全分散寄与率(%)		14.2	14.1	14.1	12.8
累積分散寄与率		14.2	28.3	42.4	55.2

(注) 「神経質」の項目は削除した。

付表2. スポーツ行動の結果に対する信念
の因子行列 (回転後)

因子	意見項目	F ₁	F ₂	F ₃	F ₄
社会生活向上因子	1 連帯感の増加	-.736			
	2 協調性性格の養成	-.735			
	3 生活の充実	-.726			
	4 可能性への挑戦	-.714			
	5 特技の将来性	-.688			
	6 エチケット・マナーの養成	-.683			.506
	7 忍耐力の養成	-.672			
	8 気分の転換	-.659			
	9 明るい性格の養成	-.657			
	10 競争する楽しさ	-.624			
	11 楽しい時間	-.600			
	12 余暇の善用	-.577			
	13 胃腸がよくなる	-.551			
	14 能力の承認	-.551			
	15 熟睡できる	-.521			
心理・社会的因子	16 苦しいばかり		.764		
	17 無器用をさらす		.742		
	18 人間関係で不快		.692		
	19 したいことができない		.628		
肥満因子	20 皮下脂肪の除去			.882	
	21 体重の調整			.867	
解不 積能	22 どう慢な態度の形成				.672
	23 からだの悪化		.467		-.518
固有値		6.573	2.742	1.867	1.509
全分散寄与率(%)		28.6	11.9	8.1	6.6
累積分散寄与率		28.6	40.5	48.6	55.2

(注) 「病気をしないからづくり」, 「敏捷性の育成」の項目は削除した。